# WAVE

K07107　横川 亜輝

*Keywords*
スタジアム　駅　アーケード
まちづくり　波　再開発

## 1. 背景

2002年日韓W杯。日本で初のW杯誘致が成功し、それに伴いサッカースタジアムの大規模な改築や新築が行われた。プロの試合を生で観戦することができるスタジアムはテレビでは味わえない熱気や歓声、臨場感があり、サポーター全員で選手を応援する際には独特の一体感につつまれる。

写真１　日本代表戦

W杯により、それまでいまひとつだったサッカー人気の上昇や各国代表のキャンプ地誘致合戦などの話題は大きな経済効果を生み出したが、W杯終了後のスタジアムにかかる莫大な維持費や、W杯仕様の収容人数の多さによる観客席の空きが後々問題となっている。それに加えてスタジアムはその規模の大きさから郊外に建設されることがほとんどで、交通手段に乏しくアクセスしにくいものとなっている。現段階では試合を見に行く以外、人々の普段の生活とはかけ離れたものとして存在している。これから先スタジアム周辺で再開発が進んだとして、はたしてスタジアムが地域の住民に馴染みのあるもの、愛着のあるものへとなっていくことができるのだろうか。

写真２　埼玉スタジアム周辺

## 2. 敷地

対象敷地は埼玉県さいたま市緑区中野田500埼玉スタジアム2002公園内のメインゲート付近とする。埼玉スタジアムは日韓W杯時に建設され、日本国内では最大級の規模を誇る60,000人以上が収容可能なサッカー専用スタジアムである。現在では浦和レッズのホームスタジアムや大宮アルディージャの準ホームスタジアムとなっているほか、国際試合の会場として使用されていることが多い。スタジアムの他にはサブグラウンド3面、フットサルコート2面とサッカー主体の公園である。

また、最近では集合住宅の建設が数多く進められており、売れ行きも好調であるため、数年後には大幅な人口増加が望める。現段階では最寄駅は埼玉高速鉄道の終点である浦和美園駅となっているが、今後東武野田線の岩槻駅やJR宇都宮線の蓮田駅方面まで延伸する計画がある。

研究指導：伊藤洋子 教授

Akira YOKOKAWA





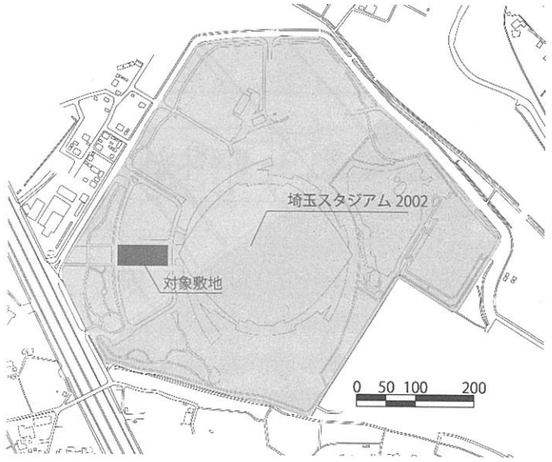



図1　対象敷地

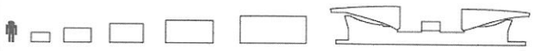
## 3. プログラム

これから先サッカースタジアム周辺で進むであろう再開発による人口増加によるインフラの整備、そしてスタジアムへのアクセスの簡略化による集客率UP。この二つを満たすために駅とそれに伴うアーケードを設計する。周辺住民にとって日常的に利用する駅とスタジアムを隣接させることによってスタジアムを毎日の風景の一部とし、生活になじませていく。その一方で試合開催時には多くの人が押し寄せ、そしてまた帰っていく。

利用頻度で考えれば周辺住民の利用が最も多いので、生活環境に合った施設をアーケードに配置していく。そのうえで試合開催時の混雑を回避するために十分なコンコースを確保する。

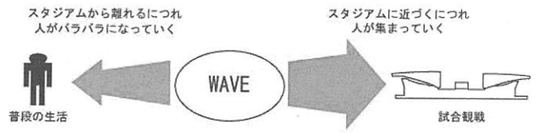
## 4. コンセプト

「スタジアム」という巨大なスケールの建築と「人」というスケールの大きく異なるものをつなぐため、スケールを「人」から「スタジアム」へ向かうにつれて徐々に大きくしていく。

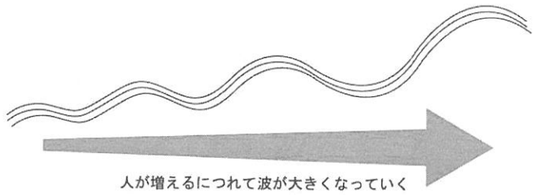


徐々にスケールを大きくしていく

これによりスタジアムに向かうにつれて一体感が増していき、離れるにつれて人それぞれの生活へとバラバラに戻っていく。

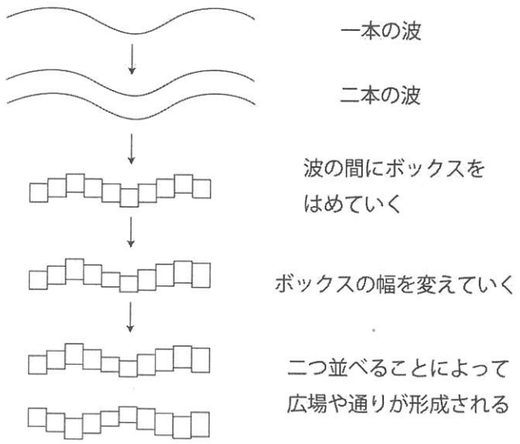



もともと埼玉スタジアムは白鳥をデザインコンセプトとして設計されたものであることや、観客席でのサポーターの応援のひとつであるウェーブから、周辺に集まる人を波として表現し、建築へと落とし込んでいく。




## 5. ダイアグラム

波を徐々に変化させていく。




**参考文献**

1) サッカースタジアムと都市：Jhon Bale/著.(株)体育施設出版
2) スタジアム基準：財団法人日本サッカー協会
3) 埼玉スタジアム2002公式HP
4) J's GOAL -Jリーグ公認ファンサイトHP
5)建築家の講義：サンチャゴ・カラトラバ

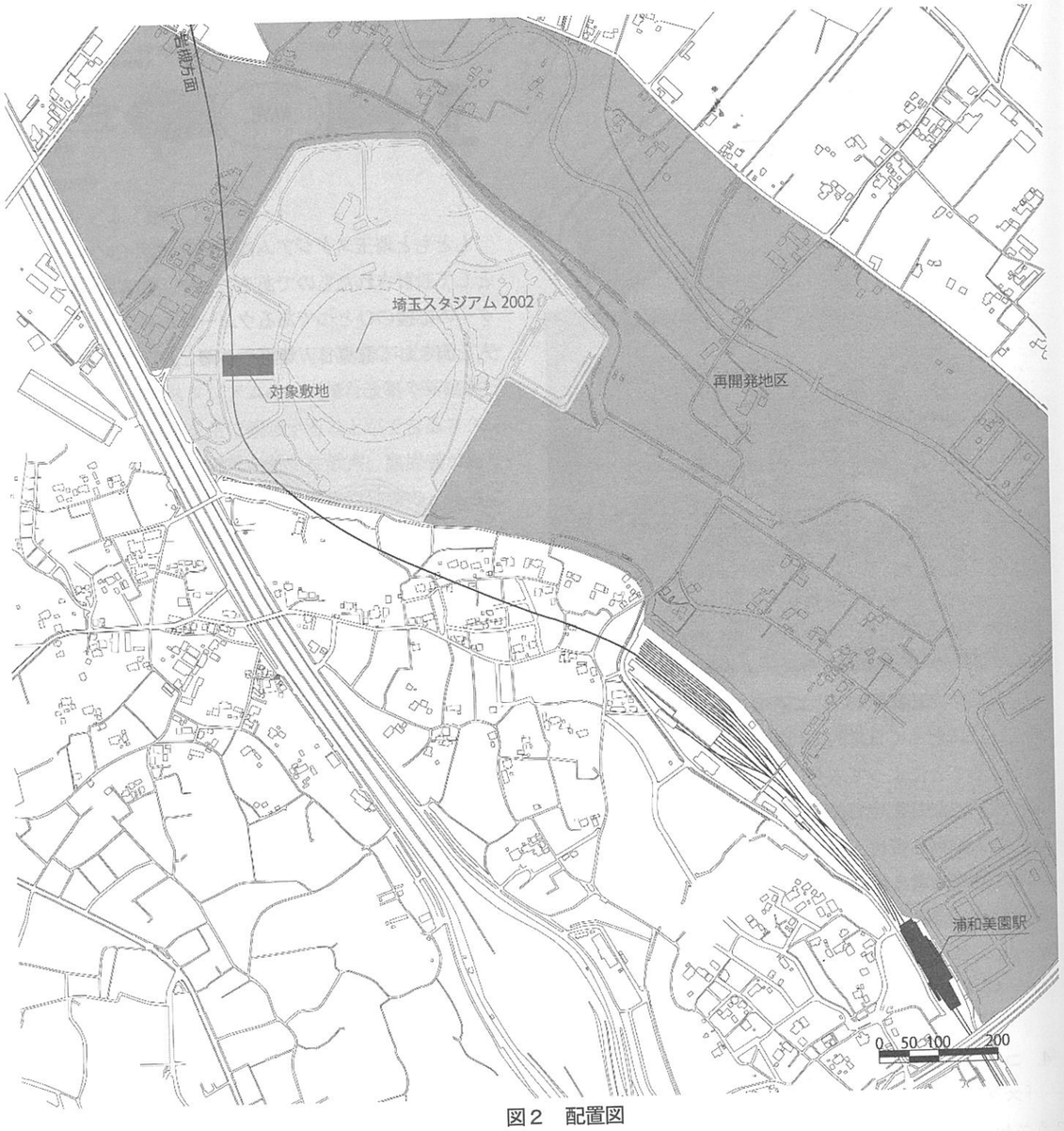



図２　配置図

浦和美園駅からの岩槻、蓮田方面への延伸路線を想定し、その上で埼玉スタジアム駅を建設。岩槻方面は市街地のため、線路の延伸は地下鉄とする。

埼玉スタジアムの周辺が再開発が進められている地区であり、今後の人口増加により交通網の整備とそれに伴う商業施設の配置を行う。駅とスタジアムをつなぐメインゲートをアーケードとし、その両側に波状に施設を配置していく。



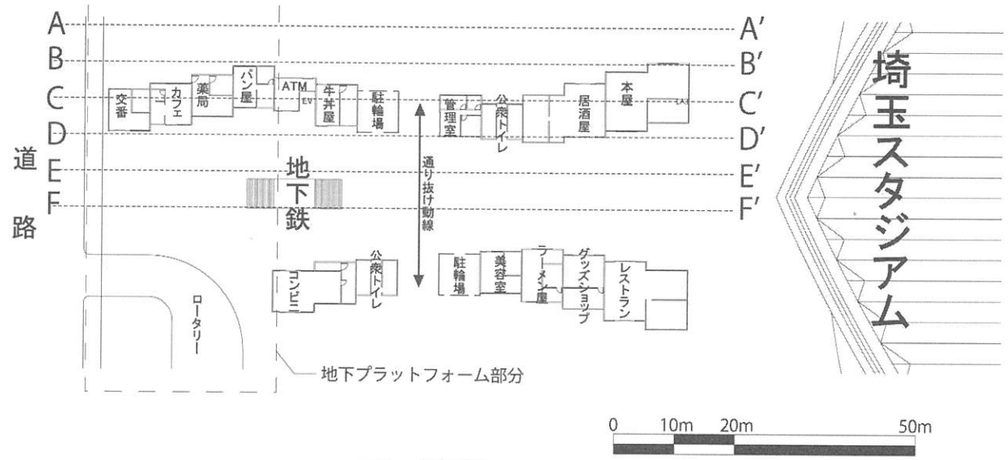



図３　平面図

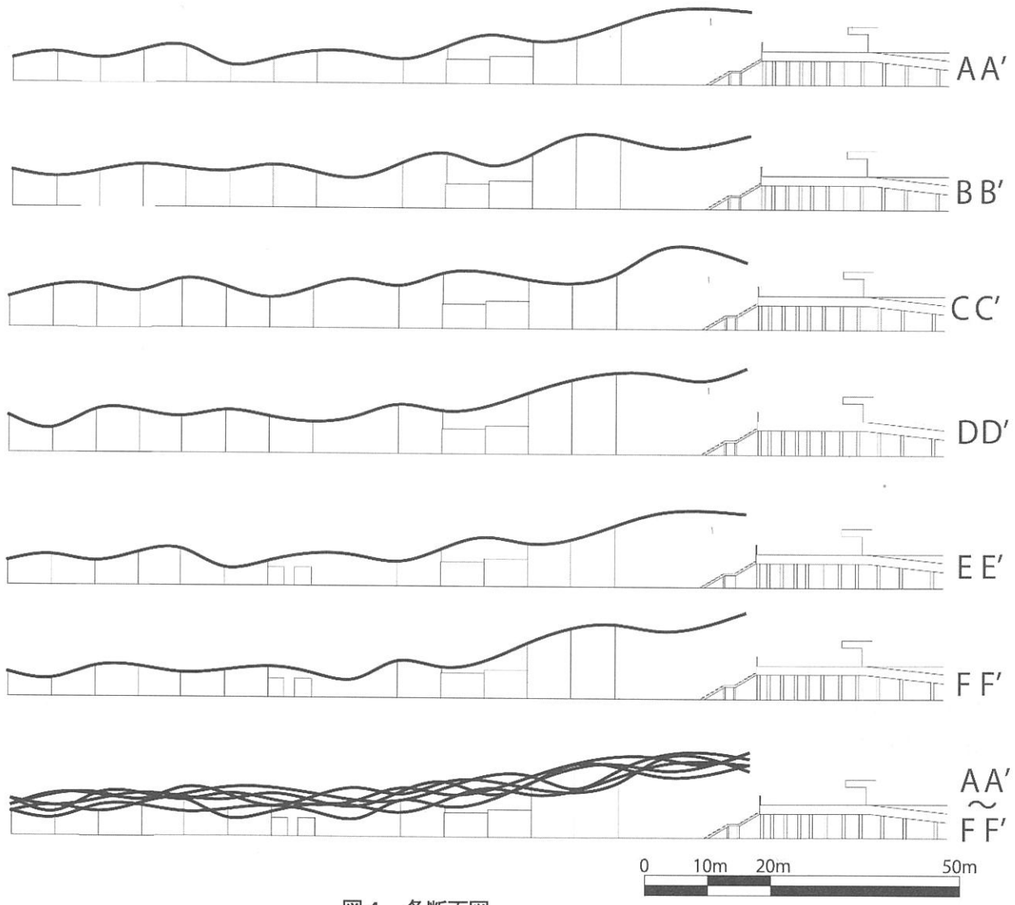



図４　各断面図